
Orbis Perfectus ~ カケラたちの物語 ~

水上 倫

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

Orbis Perfectus ～カケラたちの物語～

【Nコード】

N9776C

【作者名】

水上 倫

【あらすじ】

数字で呼ばれていた少年が、ヘンテコな仲間たちと一緒に長い長い旅をする物語。普通と違うこと。それは相手に恐怖心を抱かせてしまうもの。傷つけられることも多いけれど、どこまでも優しい彼らが、優しくないこの世界にもたらすものとは。

プロローグ

カーン、カーン、カーン……

異変を告げる鐘の音が、もう半刻もの間、途切れることなく続いていた。

「参号棟からも火の手っ！」

「第玖蒸気機関、稼働停止！」

「被験体、8割の行方が不明です」

「データを燃やすな。体を張っても死守しろ」

乱れ飛ぶ怒号。

駆け巡るロープ姿の人々。

誰しもの頭に浮かんでいたのは同じ疑問だった。

『一体なぜこんなことに……』

その騒ぎをよそに、広大な建物群の一角、零号棟と呼ばれる小さな建物の屋上から、一部始終を見守る人物がいた。

腰は曲がり、肌には深い皺が刻み込まれているが、その黒い瞳は少年のそれを思わせる強い意志を湛えている。

他と比べて明らかに多くの煙を上げていた建物が崩れ落ちた。

だが、男は眉一つ動かさない。そして、まるでそうすることが己の務めであるかのように、じっと崩壊していく彼の愛する研究所を眺めていた。

「エニグマ様」

背後から声を掛けられ、彼は振り返った。

「やはりここでしたか。お探しいたしました」

ひざまずき、頭を垂れた人物がそこにいた。

声の調子はたおやかな若い女性のものでありながら、どこか芯の

強さを感じさせる。

そして、右往左往する他の人影と同じ、質素なフード付きのローブを身にまとっているにもかかわらず、緩やかな布の流れでは隠し切れない妖艶さが立ち上っている。

「アリサか。計画に穴があったようだ。オクテアの所在は？」

アリサと呼ばれた女性は無言で首を横に振った。フードからこぼれた金の巻き髪が豊かな胸元で大きく揺れる。

「そうか。……あるいは、あれが発端やもしれんな」

エニグマの楽しげな呟きに、アリサの頭が弾かれたように動いた。自分にまっすぐ向けられた彼女の眼差しに宿る非難の色を見て取り、老魔道研究家は苦笑した。

「お前も、あれが嫌いなのだったな。あれの前に立つと、心がざわめくのだろう？」

「私はただ……人間ではないものが人間の姿かたちを持っていることに違和感を覚えるのです」

遠くで、また一つ建物が崩れる音がした。

「人間ではない……？ まさしくその通りだ。しかし、だからといって人間に劣ると言うわけではない」

「では、意志のない人形が人間より優れているとおっしゃるのですか？」

アリサは師の言葉の意味を図りかねていた。

「異なるものの優劣を問うのは愚者のすること。お前はまだ知らぬことが多すぎるのだ」

優しく愛弟子を諭しながら、エニグマは胸のうちに言葉を飲み込んだ。

（オクテアが呼び起こす心のざわめきが、このエニグマですら免れ得ぬ畏怖であるという事実も、その意味するところも、お前はまだ知らぬのだ）

押し黙った二人の元に、風が悲痛な叫びを届けた。

「老師ーっ！ どこに、どこにおられるのですか！」

それは、絶対的な指導者を欠き、パニックに陥った研究所の職員の声だった。

「やれやれ、仕様のない。行こうか」

エニグマは、アリサを促すと階下へと足を向けた。

第1章1節：オクテア

研究棟の2階、奥まったところに位置する研究室で、一人の男が必死に資料をかき集めていた。

他の研究員たちは既に逃げ出していたが、彼は主任研究員として、自分の研究結果を守らねばならなかったのである。

だが、火の手が迫っていた。

既に彼のいる部屋にも炎が回り始めていた。

男は、全てを回収する時間は残されていないことを知っていた。諦めねばなるまい。自分が死んでは元も子もないのだから……。

そう思い、出口に向かおうとした瞬間、彼はそこに驚くべきものを見た。

呼吸が荒くなる。

燃え盛る火炎が、周囲の酸素濃度を下げているためもあるう。

だが、原因がそれだけではないことを男は知っていた。

純然たる恐怖が心臓をしめつけ、肺をこわばらせているのだ。

「なぜ、お前がここに……？」

あえぐように絞りだされた言葉が向けられた相手は、一人の裸の少年だった。

数字の8を意味する【オクテア】という名で呼ばれる、この魔道研究所で最も特異な実験体。

この世界と相容れない存在である彼を、おびえる男はよく知っていた。

「ふ……復讐にきたのか」

後ろ暗いところのある者の言葉である。

何の感情も読み取れない少年の蒼い瞳は男に向けられていた。

だが、男の存在を認識しているのかどうかは怪しいものだった。

突然、何かが弾けるような音がしたかと思うと、燃え盛る木材が二人の間に落ちた。

砕けた破片が炎をまとったまま二人に降りかかる。

ローブの男は慌てて飛び退ったが、オクテアは身じろぎ一つしなかった。

炎が一糸まとわぬ少年の純白の肌を焼く。

見ていた男でさえ顔をしかめる光景だというのに、少年は何事もないかのように立っていた。

そして実際、何事もなかったかのように焼け爛れた肌は傷一つない状態に戻っていく。

その人間では在り得ない回復能力を、男は日々目にしてきた。

彼は知っている。

オクテアの身体は1cm程度の傷であれば1分ほどで完治させられる。

傷が複数個所に及ぶ場合、個々の治るスピードは個数に比例して遅くなる。

小さくても深い傷、たとえばナイフなどで刺された場合はやや遅い。

単純な骨折は骨の太さによって、30分から1時間。

たとえば指を完全に切断したとしても、数ヶ月で再生させる。

彼が今抱えている研究資料を開きさえすれば、より詳細なデータが入手可能であった。

この数年間、彼と仲間の研究者たちが少年に与えた傷の数だけの、膨大なデータが……。

その資料が、何者かにひったくられるかのような感触と共に突然彼の手の中から消えた。

腑抜けたように両手を見下ろした男が、再び少年に目をやったとき、彼の探し物は少年のもとにあった。

より正確に言えば、彼の足元にいる大きなトカゲの口にくわえられていた。

オクテアはトカゲを書類ごと抱き上げると踵を返した。

目的は果たした、とでも言いたげなその背中に男は声を掛ける。

「俺は……悪くないぞ。命令でやったんだ。俺がやらなくても、他の誰かがやった。恨むんなら人間に生まれなかった自分の運命を恨め！」

少年は振り返らなかった。

代わりに、彼の肩ごしにトカゲが牙を剥いた。

男は迫り来る炎に視線を投げながら、その場にへたり込んだ。

「解き放たれてしまった。……悪魔が……この世に」

第1章2節：トカゲ

燃え盛る炎の中、オクテアは歩いていた。

彼を見咎める人間は誰もいなかったが、もしいたとすれば、何か目的を持って歩いているものと考えたに違いない。

だが、実際はそう単純なことではなかった。

オクテアは自分の意志というものを持っていないのである。この世に発生して以来、能動的に何かを行なったことがなかった。今日まで自分の足で立って歩いたこともなかったのである。通常の人間であれば、とっくに筋肉が退化しているだろう。

だが、オクテアと人間は似て非なるものであった。古文書が彼に与えた名を「ホムンクルス」という。

そんな彼が今、両手で自分に関する研究資料を抱え、研究所の外へと出ようとしているそのカラクリの鍵となるのが、彼の肩に鎮座している体長17cmほどのトカゲだった。

時を遡ること約半日、トカゲは今朝【覚醒】した。

そのとき、彼の目の前にはローブ姿の巨大な男が2人、言い争いをしていた。

「また失敗だ。そもそも竜の同位体としてトカゲというのが間違いないじゃないか？」

「だからコウモリでも並行して実験を進めているじゃないか」

「そういう問題じゃない。形質学的な研究をするというのなら、まずは合成獣実験^{キメラ}だろう」

「それはそれで進行している」

「ああ、知ってるよ。失敗続きだがな」

「他の班の事はいいだろう？ 自分たちの研究に専念しないことは……」

「だから、俺たちの研究は時期尚早だつて言つてんだ！」

掴み合いに発展しそうな白熱した論争を繰り広げる男達に気づかれぬよう、トカゲはそつとその場を逃げ出した。

男達がそれに気づいたのは優に半刻が過ぎてからだったが、彼らはそれを大して気に留めなかった。

檻に入れていたわけでもない実験動物が、目を離せばどうするかぐらい自明である。そこに知性の高い低いは関係ない。

実験体の管理は研究者の義務であるため、彼らは管理責任を問われぬように共謀してトカゲを死んだものとする報告書を書き上げた。本来であれば、それで終わりだったに違いない。

だが、彼らの誤算は、不完全ながらも彼らの実験が成功していたことであつた。

覚醒したトカゲは、目の前の男たちの会話から自分の置かれた状況を知った。

彼らの話す人間語は、トカゲの小さな体に埋め込まれた意識体の知るものとは少し異なっていたが、それは理解できないほどの乖離ではなかった。

彼の肉体が減じた時代からどれほどの時間が経ったのか、あるいは人間たちがどんな手法を用いたのかは定かではなかったが、彼の精神のカケラが小さなトカゲに埋め込まれ、眠りから覚醒したのである。

（小賢しい人間どもめ……）

忌々しい思いをこらえ、屋根裏の通気口に潜り込んだトカゲは、前触れもなく強烈な精神体を感じし、そのあまりの強大さに失神し

そうになった。

（これは一体？ ……まさか、喪われたはずの？）

その精神体の所在を辿った結果、トカゲはオクテアを見つけたのだった。

第1章3節：森の中

生存本能という生物に本来備わっている力を欠くオクテアを【操縦】するのは、竜種の強靱な精神力と卓越した予見の力を持つてしても困難なことだった。

右へ曲がれ、アレを拾い上げる、というような単純な指示を遂行する上では何の問題もない。

人が来たら物陰に隠れる、というような条件による行動も取れる。だが、経験に基づくより高度な判断が出来ないため、危険を避ける、といった抽象的な指示に従うことが出来ない。

なんとか、炎を避けること、尖ったものを避けることなどは教え込むことには成功したものの、トカゲには先が思いやられた。

混乱に乗じて住居棟に忍び込み、できるだけサイズの合う服を拝借して研究所を出るまでの数刻が1日にも感じられるほどだったのである。

トカゲに教えられた通り、ブカブカのサイズのローブを頭から被ったオクテアは、研究所を覆い隠すように繁った森の中で木の根本に膝を抱えて座っていた。

その爪先には資料が広げられており、トカゲはその上を歩き回りながら内容を追っていた。

時折、トカゲの合図に従って紙をめくる他には、オクテアは一切動こうとしない。

資料によれば、オクテアが【発生】したのは今から3年前。

名前が指し示すとおり、彼の前にも同様の実験が7例行なわれ、そのすべてが失敗に終わっていたようだが、その詳細は資料では明らかにされていなかった。

始めのうち、研究員達はオクテアの発生に心を躍らせ、この世の

すべてを知るといふホムンクルスの知恵を引き出そうとオクテアに働きかけたようである。

だが、オクテアが何にも反応を示さないことがわかると扱いに困り、その驚異的な回復力が発見されるに至ってついに耐性実験という名の虐待が始まったのである。

トカゲは、目を覆いたくなるような内容ばかりとなった資料を読むのをやめ、オクテアの肩へとよじ登った。

これまで行なってきた、言葉を介さずに意識同士を直接交差させる【心話】と呼ばれる方法ではなく、音を聞かせるためである。

「アエロス」

声と呼ぶにはあまりに弱い囁くような音で、トカゲはそう言った。「アエロス、大気の子。我汝に名を授けん。我が呼びかけに応えよ」

呪文のような囁き声は途切れながらも一晩中続いた。

そもそも声を発するようにはできていないトカゲの喉は、無理に声を出そうとし続けたことで酷く痛んだ。

それでも、少年が【オクテア】と呼ばれた回数を超えて新しい名を呼ばない限りは、新たな名前を授けることはできない理^{ことわり}だった。

第1章4節：魔道研究

世界最大の魔道研究所が焼け落ちたという報せは、四大陸を駆け巡り、人々を大いに失望させた。

魔道研究が始まったのは今から半世紀以上前、北の大陸ロワンで出土した古文書がきっかけだった。

その書物は神話に過ぎないと思われていた【神々の時代】に書かれたと思しきものだったが、保存状態があまりに良すぎることから、当初から真偽のほどが疑われていた。そして、内容の研究が進むうちに、全体的にはごく一般的な古代語で書かれているにも関わらず、肝心の【神々のすなる業】即ち魔道に関する記述は、解明されていない語に溢れ、内容が汲み取れないことから、巧妙に作られた贋物であるとされていた。

発掘したと主張していた古代学者は嘘つきの烙印を捺され、失意のうちに世の表舞台を去った。

だが、その学者は諦めたわけではなかった。

書の正当性を露ほども疑わず、息子と共にその生涯を投げ打って研究に勤しんだのである。

贋古文書騒動から四半世紀の歳月が流れ、詳細はもとより、事件そのものの記憶さえ失われ始めた頃、ひとりの男が圧倒的な魔道知識を携え世に現れた。

伝承の【神々のすなる業】そのままに、男は炎を操り、湖を凍らせ、宙に浮いて見せた。

人々はその力に熱狂し、男を神の生まれ変わりであるかのように崇めた。

各地の王はこぞって彼を宮廷に招き入れようとしたが、男は首を縦に振ることはなかった。

「魔道の力の一部の人間のものとするにはあまりに強大であり、道を誤れば世界の均衡を崩しかねない。私はこの力を万人が利用できるよう広め、またより多くの業を研究しようと考え。報酬として望むのは、ただ父の名誉の回復である」

子供の頃から父の古文書にかける情熱に触れて育ち、いつしかそれを自らの生きる糧として成長したその男は、名をエニグマと名乗った。

共に古代の智恵を追い求めた父が、世に忘れ去られたまま死の床についたための決心だった。

せめて命あるうちに、父親が不当に着せられた不名誉をすすいでやりたいと考えたのである。

かくて、二人の男によって細々と続けられてきた研究は人の知るところとなり、魔道研究は国の境、大陸の境を越えて行われるようになったのである。

人類の生活を豊かにする研究として、さまざまな成果を挙げることで、資金はより潤沢に与えられるようになっていった。

その資金をふんだんに注ぎ込んで建てられたのが、ロワン大陸の【漆黒の森】に建てられたエニグマ自らが指揮する研究所、【研究主座】であった。

研究主座の炎上は、人類にとっての大きな損失であり、魔道研究における大きな後退であったのである。

第1章5節：アエロス

「アエロス、アエロス……」

朦朧とする意識の中でホムンクルスの少年に向かって名を呼び続けていたトカゲは、いつの間にか少年が自分を見ていることに気づいた。

今までの焦点の合わない瞳ではない。確かにはつきりとした意志を持って見ているように思われ、トカゲは勢い込んで少年に尋ねた。
「我、汝に問う。汝が名は？」

呼びかけた名に応えること、自らその名を名乗ること。

その2つが果たされるまでは、新しい名は少年のものとはならない。

だが、少年は答えず、トカゲは肩を落とし、再び名を呼びはじめた。

「アエロ……ス？」

トカゲは、かすれていた自分の声が人間の声のような滑らかなものになっていることに驚き、思わず口をつぐんだ。

疲れきっていたため気づかなかったが、身体の様子がおかしかった。

大量の魔力を吸収し、30cmほどの大きさになっていた。

「アエロス、君か。私に何をさせたい？」

2人が研究所を出られたのは火災が起きたからであるが、それは偶然の事故などではなかった。

アエロスの発散する強大な魔力が、トカゲを小型の竜へと変貌させたのである。

それは魔道の基本である、記憶が及ぼした変化であった。
目に見えるものが事実であるとするのであるなら、魔道は世の真

実を暴く力である。

あるべき理を整えて、術者の望む本質を引き出すのである。
水は氷の記憶と蒸気の記憶を持っている。

そこで、気温が急激に下がったという理を与えてやれば、エニグマが行ったように湖を凍らせることができる。

空中に炎を走らせるには、炎の記憶を持つ物質、たとえば石炭の細かなカケラを舞わせて熱を受けたという理を与えるだけである。

理を作り出すには、魔力が要る。

トカゲが竜であったころは、その身のうちに魔力を生む【源の石】を宿していたため、自在に炎を操ることができた。

体内から取り出されてしまうと、どんどん小さくなりついにはなくなってしまう【源の石】だが、竜ほどの大きさはなくとも、それを体内に宿している生き物は多く存在する。

生まれ持つて魔力を持たない人間は、そのような生き物から石を奪うか、人工的に【源の石】を模して作った【賢者の石】を使用しない限りは理を操れない。

【源の石】を持つ生物に関する知識の失われた今、エニグマの魔力の源は古文書に記された材料から抽出された、液状の【賢者の石】のみであった。

だが、オクテアと呼ばれていた少年は【生きる源の石】と言える存在だった。

エニグマを含む研究所の人間たちがそのことに気づかなかったのは、彼が魔力を身のうちに留めていたために他ならない。

魔力に敏感なトカゲでさえ、断続的にしか感じなかったほど、オクテアはその強大な魔力を巧みに隠していたのである。

そして、トカゲが魔力の流出を感じた瞬間というのは、アエロスが研究員によって痛みを与えられる瞬間に他ならなかった。

精神のあがる苦痛の叫びが、魔力の迸りはしとなってトカゲを呼び寄せたのは、必然であつた。

研究者たちの非道な行為を見守るうち、トカゲは自分の身体が浴びせられる魔力を吸収して、大きく成長していくのを感じた。

竜としての本質が現れ始めたのである。

研究者たちは、魔力に触れると残忍さを増していくようであつた。それが彼らの本質ということであろう。

たつぷりと拷問を与えた男たちが、オクテアを檻の中に閉じ込め去るころには、トカゲは通気口を完全にふさぐほどの大きさになっていた。

なんとかそこから這い出し、人形のように動かないオクテアの傍に寄つていったトカゲは、彼を連れて研究所を出る決意を固めていた。

「アエロス」

はつきりとした声でトカゲは呼びかけた。

少年の口が開く。

それは、ゆるぎない能動的な行動だつた。

「声を出せるか？ 自分の名を言うんだ。それで名前は君のものになる」

「あ……う？」

表情こそなかったが、少年は声を発しようと努力していた。

「あ……う？」

トカゲは少年を励ました。

「そうだ。アエロス」

「あ……お？」

「舌と歯を使って音を変えるんだよ。あ、え、ろ、す」

「あ、え、お……」

「いいぞ。歯を合わせて音を出すんだ」

「す？」

「ろ、は口を少し開いて歯の後ろに下の先をつける」
「る」

「もう少し後ろだ」

「ろ？」

「そうだ、もう言える。言ってごらん、君の名を」

「あ、え、ろ……す」

トカゲは、興奮を飲み込み、少年に改めて問うた。

「我、汝に問う。汝が名は？」

「アエロス」

第1章6節：エニグマ

エニグマは闇の中、目を覚ました。

夜明けはまだ遠いのだろう。見慣れぬ部屋には、月の光さえ射していないかった。

難を逃れ、地元の領主の館に弟子たちと共に庇護を求めたことを思い出す。

研究所の再建にはかなりの時間が掛かるだろう。

明日は百人を超える大所帯の、今後の身の振り方を考えねばならない。

少しでも長く眠ろうと目を閉じると、燃え落ちた研究主座の様子
が、逃げ惑う研究者たちの声が、目の前で今起きている出来事
のような真実味を伴って甦った。

彼が築いてきたものの象徴が喪われたのである。

ただ無性に悲しくなり、彼は声を殺して子供のよう到大粒の涙を流した。

あれほど大きな火災だったが、幸いなことに死者はなかった。

檻に入れられたままの実験動物は恐らく死んだに違いない。

ひとつひとつに思い入れはないが、どの研究対象もエニグマにと
っては大切なモノである。

安定して成功する実験などほとんどないのだから、二度と手に入
らないかもしれない貴重な資料が失われてしまったのだという思い
は、彼を切なくさせた。

特にオクテアは、何としてもこの手に取り返さねばならない。

研究所に働く人々のすべてと、全施設を合わせても、オクテアの
価値には及ばない。

古文書は多くの知識をもたらしてくれたが、しょせんは書物である。

端から端まで読みつくしたエニグマに、新しい知識を与えてくれるものではなかった。

言い伝えによれば、ホムンクルスはこの世のすべてを知るというオクテアはおそらく不良品なのであろう。

だが、正しくホムンクルスを生産するためには、不良品の研究も重要だった。

ホムンクルスの生産は、エニグマが研究所を立ち上げた当初から取り組んでいる最も重要な研究である。

過去の失敗を元に、気温、湿度、材料の組み合わせなど、少しずつ条件を変えて取り組み、ついに形となった。

もう一步のところまで来ていると言ってもいいだろう。

いや、来ていた、のである。

特に重要な資料は問題なく持ち出せたが、長い歳月をかけて収集した貴重な薬品や材料が燃えてしまった。

鎮火したら、燃え残りがいないか人を派遣するつもりだったが、期待はできなかった。

「父さん、私にはやり遂げられるんでしょうか」

涙を拭いもせず、仰向けのままエニグマは天に向かって語りかけた。

手を伸ばせば届くところにあっただはずの目標が、今は遥か遠いところにある。

「神よ。私に嫉妬したのか」

思わずそんな言葉を口にして、老人は自嘲めいた笑い声を漏らした。

エニグマは、神など信じてはいなかった。魔道には理がある。

すなわち、魔道とは科学であり、究めれば神と呼ばれた古代の人間に等しい力を手に入れることができる道理だった。
「私は諦めん。何度でも立ち上がる」

第1章7節：すき

「アエロス」

すっかり聞きなれたその名を、少年は問われるままに口にした。

目の前には赤と緑のウロコを身にまとったトカゲが口を大きく開けている。

威嚇しているようにも見えたが、笑っているらしい。

「よくできたな！」

トカゲはするとアエロスの身体を登り、肩に二本足で立つと、絹糸のように柔らかい彼の金髪を前足でかき混ぜた。

本人としては頭を撫でているつもりだったのだが、アエロスにはトカゲの行為が誉めるために行われているのだという知識はなかった。

されるがままにしていると、トカゲは疲れたのか、膝の上に降りてきた。

身体が大きいままなので、肩の上では居心地が悪いらしい。

「アエロス。正しい名を得たからには、君は今までの君とは違うんだ。感じるだろう？」

トカゲは返事を期待してアエロスを見上げたが、反応はなかった。「アエロス？ ああ、そうか。応答の仕方を教えてなかったな。」

「…そもそも言葉が理解できていないのかな？」

トカゲは仕方なく心話でアエロスの意識を探ることにした。

心話というのは言葉を経由しない意思の疎通法である。

言葉によるやり取りとは違い、問いかけたり答えたりということがない。

自分の意思を相手に送り込むか、相手の中に存在する意識のカケラに触れ、それを読み取るかのどちらかである。

アエロスの意識は、ほとんど空だった。

トカゲの送り込んだ行動規範が表面に近いところを浮遊しているだけである。

記憶や思い出という類のものが見当たらなかった。

意識領域を漂う記憶は、その内容に相応しい姿をしている。

勉強した内容が本の形をしていたり、幼い日の思い出が笑顔を浮かべた母親の姿であったり、悪夢が恐ろしい怪物であったり。

通常であれば、生物の頭の中にはそうした無数の記憶の断片が漂っているもののだが、アエロスの場合は、実に見通しのよいそして、意図的に消し去ったとは思えない　状態になっていた。

トカゲは心話も諦めた。

「いいさ、ゆつくりやろう」

トカゲはアエロスにやさしく話しかけた。

「アエロス」

呼びかけると、アエロスはトカゲを見る。

「名前のほかで一番最初に覚えるのは、『すき』にしよう」

トカゲは、自分の「すき」な感覚をアエロスに心話で伝えた。

春先の緑に覆われた地面のぬくもり、雨の奏でる心地のよい音、凜とした冬の朝の空気、甘いリンゴの味……。

「これが『すき』だよ。気持ちのいいこと、素敵なこと、幸せなことで、やさしいこと」

アエロスは目を閉じると、かみ締めるように発音した。

「すき？」

「そう、すき、だ」

トカゲも目を閉じる。ずーっと長いこと眠っていない。睡魔が忍び寄ってきていた。

「すき」

膝の上で丸くなって眠ってしまったトカゲを、アエロスはそっと腕で包んだ。

誰に教えられたわけではなかったが、寒くないように、安心して眠れるように、トカゲを脅かす者すべてから護るかのうちに……。

第1章8節：主座被害状況

【漆黒の森】の研究主座の焼け跡では、発掘作業が行われていたが、甚大な被害を目の当たりにし、作業に当たる研究員の手は止まりがちであった。

作業の指揮に当たっている4人の上級研究員たちは、頭を寄せ合ってエニグマへの報告をまとめていた。

18棟あった建物のうち、無事だったのは離れたところにあった職員宿舎と事務所、そして自操品の研究棟のわずか3棟のみであった。

自操品とは、一定の暗さになると点灯するランタン、語りかけると歌を歌う人形などの、魔道技術を転用した品であり、好事家や王侯貴族の間で珍重される高価なものである。

エニグマは魔道が広く市井にも利用されるものとなることを理想に掲げてはいたが、実際のところ、自操品などはその高価さ故に遠く手の及ばないものであった。

焼失した研究棟の15の建物は【賢者の石】の抽出工場、抽出技術の効率化研究施設、魔道材料の保存庫などの魔力関連施設が5棟、既存の古文書の解読、各地の伝承の研究などを行う学問棟が2棟、合成獣や古代生物、対生体魔道、ゴーレムなどの研究を行う生命研究施設が4棟、そして目的が公にされていない上級研究員用の建物が4棟である。

今はアエロスという名となったオクテアやトカゲがいたのも、その内の一棟である。

エニグマの父親が発掘した古文書はもちろん、重要な書籍の大半は無事に持ち出されていたが、研究記録の多くが失われていた。

また、研究に使用されていた動物の一部は檻から逃げることで出来ず、命を落としているのが見つかったが、檻が壊れて逃げ出したものも多かった。

また、明らかに人の手によって檻の鍵を開けられた形跡のある研究棟もあり、具体的な数字は不明だったが、100匹程度は逃げたものと思われた。

「絶望的ね」

アリサはお手上げ、というジェスチャーをしながら首を振った。

「そう言うなって。自操品工場が残ってるんだぜ？ お偉いさん達も胸を撫で下ろすさ」

ジュードという名の短髪の男が茶化した。決して心からの言葉ではない。彼が心血を注いでいたゴーレムも灰燼に帰してしまったのである。

「エニグマ様の心中を思うと、報告に行くのも気が重いな」

少し年配の男がぼつりとこぼした。彼の名はエクレディス。【賢者の石】の精製技術研究を担当していた。

「師匠は、あのお人形さんがいなくなつたのを気にしてたわ。アレを探し出せば、喜ばれると思うわよ」

アリサはフードを下ろし、髪をかき上げた。美しいが、気の強そうな面立ちが露わになる。

「オクテアか。どうなんだ？ 火の出所はあいつのとこだっていう噂だぜ？」

ジュードは、ずっと口を開いていない4人目の人物に問いかけた。「事実だ」

愛想のない短い返答は女性の声だったが、その外見にはアリサと

は対照的なほどに色気がない。

肩口でばつさりと切った銀髪といい、淡灰色の瞳といい、もともと色素が薄いのに加えて、鋭い目つきと細い鼻梁、そして薄い唇の組み合わせは彼女をいかにも冷酷そうに見せていた。

「おいおい。意識を持たないお人形さんが天下の研究首座に放火した犯人だつてことかよ。ホムンクルス班としては、ますます探し出さないわけにはいかな、マリଆ「アンナ」ベアトリーチェ？」

ジュードが悪戯っぽくそう呼びかけると、銀髪の女性の瞳に怒気が宿った。

「トリスと呼べ」

元々は良家の出である彼女が、いかにもお嬢様らしい本名で呼ばれるのを嫌っているのを知りながら、わざとやっているのだから、ジュードも人が悪い。

「そこまでだ」

エクレディスが噛み付きそうな表情のトリスを制止し、ジュードを戒める。

「苛立たいしい気持ちは私とて同じだ。だが、トリスに八つ当たりするんじゃない」

「そうよ。あんな不気味なものの押し付けられた上に監督責任を問われたりしたら、トリスが可哀想でしょう？」

アリサもそう言つて、トリスに片目をつぶってみせる。

自分の分が悪いことを悟ったジュードは、肩をすくめた。

「へいへい。俺が悪かったよ。まあ、俺の灰になっちまったゴーレムはともかく、逃げた魔道生物は早いところ捕獲しないと厄介なことになるつてことにはみんなも賛成だろ？」

異論のあろうはずもなかった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9776c/>

Orbis Perfectus ~ カケラたちの物語 ~

2010年10月17日03時12分発行